

カーボン年代より見た先史時代の バルチスタンとインダス平原

徐 朝 龍

戦後、カーボン年代測定法の導入によって、世界各国の考古学研究がめざましい飛躍をとげたことは周知の事実である。南アジアの先史時代考古学の分野においても、この有力な科学的手段が積極的に活用された結果、全面的な文化の編年は大きなインパクトをうけて展開してきた。その中でも、バルチスタン(Baluchistan)とインダス平原(The Indus Valley)との先史文化に関する研究に見られる進展は特に著しいものがある。

バルチスタンとインダス平原における先史文化に関するカーボン年代のデータ数は数百にもものぼり、カーボンデータをもつ遺跡はほぼこの広大な地域をカバーし、先史文化の年代決定に大きな影響力を確実に増しつつある。そのうち、ハラッパー文化にかかわるデータは大多数を占め、注目されている。これらのカーボンデータは主にインドのボンベイにあるタータ基礎科学研究所(The Tata Institute of Fundamental Research)、アフメダーバード(インド)にある国立物理学研究所(The National Physical Research Laboratory, 略称: PRL)、ペンシルバニア大学博物館考古学実験センター(The Museum Applied Science Center for Archaeology, University Museum, University of Pennsylvania, 略称: MASCA)、大英博物館(British Museum, 略称: BM)などから発表されたものである。また、その成果の整理とデータベースの作成に特に大きく貢献したのはD.P. アグラワルとS. クサムガル[Agrawal and Kusumgar 1964~1971]とG.L. ポセール[Possehl 1988]である。

他の地域の研究者とおなじように、カーボン年代に対する南アジア考古学者の態度は、かつて無視、半信半疑、あるいは全面信用など、さまざまであった。しかし、1968年、R.E.M. ウィーラーがカーボンデータの利用に関する四原則を提案した[Wheeler 1968: 120-121]ことを契機に、カーボン年代の合理的な利用は大きく促進された。そして、その後の自然科学の進歩による新しい年代修正方法の開発[Michael and Ralph 1971, 1973]によって、データの科学性と正確さも大幅に向上し、近年、カーボン年代の積極的な利用

は増加の一途をたどっている。蓄積されてきたデータは、時間がたつにつれて、ますます重要視され、特に複数のデータが示す同一の年代のホリゾン、あるいは、各地域の間に見られる接近しあう年代の幅は、編年の枠組みに大きな意味をもつものとして注目を集めている。遺跡を年代の上に位置づけるために、発掘による証拠とともに、大量なデータに基づいた指標となる年代が決定的な役割を果たすケースは珍しくない。実際に、近年の傾向として、基本的な編年は、単に遺跡の層位関係と遺物に対する型式学的研究に基づいて行われているだけではなく、カーボン年代に対する依存度を高くしつつある。

バルチスタンとインダス平原における先史文化の編年に関する代表的な考えかたとしてウィーラー [Wheeler 1968], デイルズ [Dales 1965, 1973], メドウ [R.H.Meadow 1973], フェアサービス [Fairservis 1975], オールチン [Allchin 1982], アグラワラ [Agrawala 1982] などがある。これらはカーボンデータに対するとらえかたや依存度はさまざまであるけれども、一様に深くかかわっていることには変わりなく、各案とも結果としておおかた接近していることはたいへん興味深い。このことは、カーボンデータによる年代づけの再構成と型式学研究の結果とが基本的に一致する事実を示し、その上に成立した編年の枠組みもしいに本来の姿に近づきつつあることを示していよう。しかし、以上の諸案はほとんど個別のカーボンデータを個別の遺跡の層位と対応させているのにとどまり、複数のデータ全体に反映されている諸文化の動向や、諸文化間の関連に対する関心は決して充分だとは思われない。一方、大量のカーボンデータは編年の信憑性を一層高めたばかりでなく、先史文化の展開や興亡についても強い示唆を与えている。そのため、カーボンデータの角度から文化の編年上の位置づけ、相互関係、文化展開の全般的な傾向などを検証する必要がある。遺物から年代へというのは考古学の基本方法であるが、その逆にカーボン年代の方から、すでに成立し、あるいは、成立しつつある、文化の体系に対して、いわば「逆検証法」ともいうべき方法でその編年を再考することも効果的であると予想するのである。本稿はそういった考えに基づき、カーボン年代からバルチスタンとインダス平原における文化の年代および相互関係を再整理し、従来の説を検討することを目的とする。なお、本稿の中で使用されるカーボンデータはいずれも半減期5370 B.C. を基準に一括修正された、いわゆる「MASCA 修正値」である [Possehl 1988]。また、本論における年代はすべて紀元前である(表1参照)。

I バルチスタン地域

バルチスタン地域において、これまで知られている最も古い定住農耕文化遺跡はカー

チ平原にあるメヘルガール(Mehrgarh, 以下は MR と略す)である。その最初の「先土器新石器期」(Pre-ceramic Neolithic period), すなわち, I A~B 期には10以上のカーボン年代が提出されている(表1)。そのうち, I A 期の六つのデータは8000年代末から4000年代末までにわたって, ばらついているが, 最も古いのは8215-7215 B.C. で, ほかのデータとの差が大きすぎるのに対し, 一番新しいのは4560-4110 B.C. で, I B 期の年代よりも新しい。したがって, I B 期の年代上限を考慮して, 6360~5470 B.C., 6200~5625 B.C.(?), 5590~5480 B.C. 等三つのデータから, I A 期の年代が6000年代後半から5000年代の前半までの間に比定されることは妥当であると考ええる。一方, I B 期に属する九つのカーボン年代の中で, 10000年をも超えたものと修正値のないものを除くと, 他の六つはほぼ5000年代後半から4000年代の初頭までの間を示している。こうして, MR I 期の年代は6000年代前半から4000年代初頭にかけての幅に入ることになる。この年代は相当長い時間を経験したことを示す, 厚さ10メートルの地層に対する I 期文化には, 相応しいものと言えよう。

MR と同じように「先土器新石器文化期」をもつ遺跡は中部バルチスタンのクエタ地方にあるキリ・グル・ムハンマド(Kili Gul Mohammad, 以下は KGM と略す)であると言われている。しかし, KGM I 期は三つのカーボン年代が与えられ, 4000年代中頃から3000年代前半までとされている(表1)。この年代は上述の MR I 期より一時期遅れたことを示すことになる。一方, MR II B 期(Ceramic Neolithic Period)にある一つのデータ(4545~3795 B.C.)はその I B 期の年代とのつながりを的確に裏付けているばかりでなく, KGM I 期の年代との一致も示している。こうしてみると, KGM I 期は MR I 期並行ではなくて, II 期と並行するものとみられよう。ところが, MR II 期の亜時期である A 期では土器が出現しはじめると報告されているので [Jarrige 1979 : 15], 土器が存在しない KGM I 期と土器出現を伝える MR II 期とが並行することになる。カーボン年代のみから行なった時期関係と抵触することになる。ただし, KGM I 期のカーボン年代のサンプルがいずれも層位の上層部から採取されたという事実 [Fairervis 1975 : 138] を考慮すれば, MR II 期との間の並行関係は必ずしも矛盾しているとは思われない。なお, この段階に入るもう一つの遺跡は北部バルチスタンにあるラナ・グンダイ(Rana Ghundai)で, その I 期の新石器文化に4510~3350 B.C. というカーボン年代が与えられている [Asthana 1985 : 259]。この時期はバルチスタン農耕文化の最初段階で, 筆者が主張した展開四段階説の初期農耕文化段階にあたる [徐朝龍 1987 : 2]。

MR III 期に対しては一つのデータ(5555~5255 B.C.)のみ発表されている。しかも, この

年代はⅠB期の年代よりも古いので、採用できない。一方、KGMⅠ期以後の層にはカーボンデータが出ていない。したがって、この時期以来、つまり、3000年代前半以降の文化を知るには、ほかの遺跡に目をむけなければならない。

バルチスタンにおいて、3000年代前半に入るカーボンデータを出した遺跡は南部地域にあるアムリ(AmriⅡB期)、バーラー・コト(Bala KotⅠ期)である。一方、バルチスタン文化と密接に関係するムンディガク(MundigakⅠ期とⅡ期)も重要なデータをもっている。アムリⅠB期は3660～3365 B.C. という年代が与えられたが、土器などの様相からは一般にその前のⅠA期とともにKGMⅢ期、MRⅢ期に比定されている。バーラー・コトⅠ期の文化は「バーラー・コト文化」と呼ばれるもので、その土器の面においてナル文化(Nal)との関連が窺われる一方、アムリ文化の影響も指摘されている[Dales 1979: 251]。Ⅰ期に属する四つのカーボン年代のうち、一つを除いて、他はいずれも3000年代前半に入っている。また、ムンディガクにおいては、Ⅰ-2～3期に3885～3650 B.C. が、Ⅰ-5期には3690～3495 B.C., 3390-3155 B.C., 2660-2290 B.C. がそれぞれ与えられた。もしそのⅢ-5期の年代(3015-2630 B.C.)を念頭において考えると、第Ⅰ期の年代は3000年代の前半にあてはめて妥当であろう。なお、ムンディガクⅠ期は土器の様相などからも時代的にKGMⅡ～Ⅲ期、MRⅢ期と並行すると考えられている。アムリ文化、バーラー・コト文化とムンディガクの文化はいずれも土器づくりと同時に定住農耕文化が始まっている。そういう意味においても、「先土器新石器文化期」を受継ぎ、土器づくりをはじめたMRⅢ期とKGⅡ～Ⅲ期との並行関係は認められよう。このような年代の幅に入った文化は、筆者の第二段階であるKGM期(Kili Gul Mohammad phase)の文化にほぼ該当する。

この段階が終わると、バルチスタンは3000年代後半という先史時代における重要な時代に入る。この時代はバルチスタンの村落文化が発展のピークに向うのにもなって、東隣のインダス平原においても文化の胎動がはじまるようになるのである。それは北部バルチスタンに隣接するゴーマル平野に位置するラフマン・デリー(Rehman Dheri)Ⅰ期とインダス平原の北端のタキシラ盆地にあるサライ・コーラ(Sarai Khola)Ⅰ期の文化である。これについては次の章で取り上げる。

MRは、Ⅳ期の上層部から得たデータによって、3025～2635 B.C. という年代が与えられた。ムンディガクでは、上にもふれたように、Ⅲ期の最後のⅢ-5期は3015～2630 B.C. という年代を出している。したがって、この二つの年代は実際の層位と関連して考えると、いずれも3000年代後半期のものと見られよう。なぜなら、クエタ地方においては、土器な

どの様相から MRⅣ期, KGMⅣ期と並行するとされるダンプ・サダート (Damb Sadaat) I 期が, 3365~2785 B.C. と 3155~2895 B.C. との二つのデータをもち, 時代の幅を示しており, 北部バルチスタンにおいては, 類似する文化要素を示すラナ・グンダイ (Rana Ghundai) Ⅲ A 期が 3470~3350 B.C. を与えられている [Asthana 1985: 259] からである。そして, 南バルチスタンにあるアムリの IC 期でも 3375~3020 B.C. という年代が出されている。これに対して, バーラー・コト I 期の上層から出ている一つの年代は 3005~2765 B.C. (UCLA-1923D) を示している。これらの年代はいずれも 3000 年代後半を占めているので, その時間の幅は筆者が分けたバルチスタン文化の四段階の中では, ケチ・ベグ期 (Kech Beg phase) と一致するものである [徐朝龍 1987: 8-14]。

3000 年前後から 2000 年代中頃にかけて, バルチスタンの農耕文化は全盛を極めていた。ダンプ・サダート II 期では一連のカーボンデータが発表され, そのうち三つ (P-522, L-180C, L-180E) は I 期の年代よりも古い, 一つは 2665~2530 B.C. を示している。そして, III 期にも 2880~2395 B.C. というデータがある。したがって, II~III 期の年代はおよそ 2000 年代前半に当てはまることになる。MR においては, VI 期, または VII 期に属すると思われるデータは 2670~2300 B.C. を出しているが, 土器様相と他の遺物からダンプ・サダート II 期~III 期との並行が認められている [Jarrige 1979: 534]。一方, このような年代の同定は, シースターン地方にあるシャハリ・ソフタ (Shahr-i Sokhta) II 期のカーボン年代によって傍証されている。土器様相などからダンプ・サダート II~III 期のクエタ文化と強い類似を示すシャハリ・ソフタ II 期には, 2960~2845 B.C., 2920~2630 B.C., 2860~2590 B.C. 等三つのデータが与えられているからである [Asthana 1985: 259]。

南バルチスタンにおいては, アムリ ID 期はカーボンデータがない。クエタ式土器や動物文様の出現, それに IC 期の年代下限 (3020 B.C.) との関連などを考えると, ID 期から III A 期 (盛期ハラッパー期) までの間には 2000 年代前半という年代が当てられよう。しかし, アムリ ID 期にすでにハラッパー文化の浸透が見られ, II A~B 期を通じて次第に強まってゆく傾向を示している [Casal 1979: 102]。このことは 2000 年代前半にハラッパー文化はすでにアムリの近辺のどこかで展開していたということを意味する。この事実はバーラー・コト II 期 (ハラッパー文化) から出された 2890~2510 B.C. というカーボン年代によってさらに支持される。このような早い時期にハラッパー文化の存在が認められたのは後述のように, インダス平原においてもこのインダス河西岸地域だけである。一方, アムリ ID 期にハラッパー文化浸透と同時に観察されるもう一つの非アムリ文化はコト・ディジ文化 (Kot Dijian Culture) である。このようなハラッパー文化とコト・ディジ文化

文化との同時出現の現象は同じく2000年代前半のMRⅦ期においても認められている[Jarrige 1979: 534]。これらの事実はその年代の位置づけとともににはなほだ意味深い問題を提起しているので、インダス平原における文化の年代を検討したのち、再びこの問題を取り上げることにする。

盛期ハラッパー文化期はおよそ2000年代中葉(約2500 B.C. 前後)から始まると広く認められている。バルチスタン地域における村落農耕文化は南部地方のクッリ文化(Kulli Culture)を除いて、ほとんど盛期ハラッパー文化の開花を前に杜絶えた。上述の3000年代前半のバルチスタン文化期は、時代的には筆者の分けた四段階の中で最後の「クエタ期」(Quetta phase)にあたる[徐朝龍 1987: 14-25]。

以上、バルチスタン地域における文化の年代関係について、カーボンデータに基づいて整理と検証を行なった結果、この地域の農耕文化の起源から終焉まで、カーボン年代に示される時代の推移と遺物に反映される文化展開との間にかかなりの一致があることがわかった。したがって、これらのカーボン年代によって把握されたバルチスタン地域における先史農耕文化全体の実年代もかなりの程度真実に近いものと認められよう。

Ⅱ インダス平原

バルチスタンと比べて、インダス平原における農耕文化の発生はかなり遅れている。これまで知られている最古のカーボン年代をもつ遺跡は前にもふれたサライ・コーラとラフマン・デリーである。このふたつの遺跡の一連のカーボン年代はインダス平原の他の先史遺跡の年代に比べて、最も合理的な順序を示し、信憑性が高いものとして注目されている。サライ・コーラⅠ期はいわゆる「晩期新石器文化期」(Late Neolithic Period)と規定され、四つのカーボンデータによって、3000年代後半に位置づけられている。一方、ラフマン・デリーⅠ期は「プレ・コト・ディジ文化期」(Pre-Kot Dijian Period)と名付けられ、サライ・コーラⅠ期と同じく3000年代後半を示す四つのカーボン年代が与えられている(表1)。この二つの遺跡は、いずれもインダス平原縁辺地帯に位置しているが、文化の様相の類似からそれらと同時期に存在していたと思われるジャリルプール(Jalilpur)Ⅰ期の文化[Mughal 1974: 109]やハークラ・ガッガル(Hakra-Ghaggar)涸河流域に沿うチョーリスターン地方(Cholistan)に分布するいわゆる「ハークラ土器文化期」(Hakra Ware Period)の文化などは、インダス平原の中央部を占めていた[Mughal 1982: 90-91]。この段階の文化は時期的に前出のバルチスタン文化の第三段階、即ち、筆者のケチ・ベグ期よりやや古いか、それとほぼ平行すると考えられる。

3000年前後、インダス平原、とくに北部地域にわたって急速に文化の開花が始まった。その文化はコト・ディジ式土器を特徴とするコト・ディジ文化である。コト・ディジ文化の遺跡から多くのカーボンデータが出ている。

サライ・コーラにおいて、コト・ディジ文化が現われたのはⅡ期である。これまでⅡA期に四つのカーボン年代が発表された。その上限は2905 B.C. であるので、Ⅰ期の年代とのつながりを示している。それに対して、ⅡB期から得たカーボン年代の上限は2400 B.C. であるので、間接的にⅡA期に年代の下限を与える(表1)。このように、ⅡA期の年代の幅はおよそ2000年代前半に入ることになる。しかし、サライ・コーラについて注目すべきは、「晩期コト・ディジ文化」(Late Kot Dijian Culture)と呼ばれるⅡB期文化の年代が完全に2000年代後半に入っているという事実である。周知のように、これらの年代はいずれも盛期ハラッパー期の枠内にあたる。サライ・コーラは、これまで盛期ハラッパー期に入る前に放棄されたと考えられているが[Mughal 1973: 45], この事実からすれば、サライ・コーラにおけるコト・ディジ文化はインダス平原が盛期ハラッパー時代に入ってから、タキシラ盆地でなお存続していたことになる。サライ・コーラには盛期ハラッパー文化の波は及んでいない。コト・ディジ文化の存続と関連して、この現象は説明されるべきであろう。盛期ハラッパー文化の時代にコト・ディジ文化が存続している事実はサライ・コーラに限る現象ではない。サライ・コーラの近く、ハティアール遺跡(Hathial)における晩期コト・ディジ文化のカーボン年代は2400-1990 B.C., 2140-1880 B.C. であり、また、サライ・コーラより北にあるガリガイ遺跡Ⅱ期(晩期コト・ディジ文化)からも2330-2125 B.C. という年代が出ている。いずれも盛期ハラッパー期に並行する。サライ・コーラの西南方向にあるジャング(Jhang)遺跡もコト・ディジ文化遺跡であるが、その下層部から得たカーボン年代は2830-2670 B.C. で、サライ・コーラⅡA期との一致を示しているのに対して、上層の年代は2390 B.C. で、盛期ハラッパー期の枠内である[Thomas & Allchin 1986: 41]。

ラフマン・デリーにおいて、Ⅱ期のコト・ディジ文化に与えられた三つのカーボン年代は2910~2765 B.C., 2880~2535 B.C., 2865~2320 B.C. で、Ⅰ期の年代と順よくつながり、2000年代前半を示している。一方、サライ・コーラと同じように、そのⅢ期の晩期コト・ディジ文化層からの五つのデータは、それぞれ2650~2170 B.C., 2420~2190 B.C., 2315~2010 B.C., 2180~1870 B.C., 2150~1770 B.C. である。その幅は盛期ハラッパー期はもちろん、後期ハラッパー期までをもカバーしているのである。ゴーマル平野においては、ラフマン・デリーのほかに、ハターラ(Hathala), グムラ(Gumla), カラム・シャー

(Karam Shah)などのコト・ディジ文化の遺跡が知られている。そのうち、カーボン年代をもつのはハターラとグムラである。ハターラ遺跡のコト・ディジ文化のカーボン年代は一つしかないが、2670~2535 B.C. を示し、ラフマン・デリーⅡ期、サライ・コーラⅡA期との並行を証明している。グムラにおいては、Ⅰ期の半定住文化の後に来たコト・ディジ文化はⅡ~Ⅲ期を占めている。Ⅱ期からは二つのカーボン年代(3040~2640 B.C., 2870~2545 B.C.)が出され、いずれも2000年代前半にあたる。しかし、Ⅲ期はカーボンデータがないが、文化の内容はⅡ期とつながるコト・ディジ文化である [Dani 1970/71: 44-46]。Ⅱ期のカーボン年代から見るかぎり、Ⅲ期の年代はすくなくとも2000年代中葉をさかのぼれないことが充分考えられる。となると、グムラⅢ期の文化はラフマン・デリーⅢ期のそれと同様に盛期ハラッパー文化期にあてはまるわけである。タキシラ盆地とゴーマル平野に見られるコト・ディジ文化が年代的に盛期ハラッパー文化に平行する現象は、ゴーマル平野の北に広がるバヌー平野においても認められる。

バヌー平野(Bannu)におけるコト・ディジ文化の遺跡タラカイ・キラ(Tarakai Qila)とイスラム・チョウキ(Islam Chawki)について、一連のカーボンデータが発表されている [Thomas & Allchin 1986: 39]。タラカイ・キラ遺跡の表面以下の層位の395センチの深さから得たデータは最も古く、2875~2530 B.C. である。この年代は上述の諸遺跡におけるコト・ディジ文化の初期段階の年代と基本的に一致するものである。この年代を得た層位の上層から、2405~2165 B.C. (深さ285センチ), 2405~2020 B.C. (深さ280センチ), 2195~1960 B.C. (深さ193センチ), 2190~1880 B.C. (深さ193センチ), 1970~1740 B.C. など、五つのデータが出されている。一方、イスラム・チョウキ遺跡において、地表下70センチの層位から得た一つのデータは2410~1860 B.C. を示している。ラフマン・デリーⅢ期とグムラⅢ期などとおなじように、データはいずれも完全に盛期ハラッパー期内のものである。なお、これらの遺跡の発掘者によると、この地域では盛期ハラッパー文化の存在は見当たらないという [Thomas & Allchin 1986: 39]。

ハラッパー文化がこの地域で現われるのは、グムラⅣ期である。報告者のA.H. ダニーによると、Ⅳ期に入る前に、グムラ遺跡全体にわたって暴力的な破壊を思わせる厚い灰層と混乱状態が観察される [Dani 1970/71: 39-40]。その後にはハラッパー文化が現われる。Ⅳ期におけるハラッパー文化の出現については実年代のデータがないにもかかわらず、一般に盛期ハラッパー期のはじめ頃、すなわち、2000年代中葉に比定されている。もし、これを認めると、このような年代決定は、ゴーマル平野からバヌー地方をへてタキシラ盆地までの地域における2000年代後半の文化展開と大きく矛盾することになる。この問題をい

かに解釈するかは、とりもなおさずコト・ディジ文化とハラッパー文化との関係をどう認識するかにかかるといえる。コト・ディジ文化が盛期ハラッパー文化に完全に先行するという「プレ・ハラッパー文化説」の立場にたてば、あるいは、ムガールの「初期ハラッパー文化説」に即して、コト・ディジ文化とハラッパー文化とを直系的にとらえる立場からすれば、当然のことながら、盛期ハラッパー文化の進出時期についての通説を堅持することであろう。しかし、完全に盛期ハラッパー期と並行関係を示す多数の晩期コト・ディジ文化のカーボン年代の存在、また、そのような広いコト・ディジ文化地域における盛期ハラッパー文化の欠如など、両説では説明のつかない大きな問題が生じる。なぜなら、一致する複数の晩期のカーボン年代は、ハラッパー文化に対してコト・ディジ文化が「先行」という位置づけに疑問をなげかけ、さらに、盛期ハラッパー文化の欠如と晩期コト・ディジ文化の年代は、両文化の「直系的」関係を否定するからである。ゴーマル平野に見られるハラッパー文化は明らかに土着のものではなく、どこからか移ってきたものである。しかし、筆者の考えでは、グムラ遺跡などの文化様相の実情を念頭に入れ、さらに上の諸重要事実を踏まえると、この地域に対するハラッパー文化の進出は必ずしも盛期の初頭より始まったと理解する必要はない。インダス平原の主体部と違って、この地域におけるハラッパー文化の勢力が著しく弱いことはグムラやヒサム・デリーなどのごく小規模な遺跡しか存在しないことから窺える。もし、その進出がハラッパー文化がピークに達した時期に始まったのならば、その勢いや規模などはもっと大きかったはずである。そうすれば、グムラに近く、この地域のコト・ディジ文化の中心的な存在であるラフマン・デリーはグムラよりまずターゲットにされたはずであろう。不思議なことに、そこではハラッパー文化による占領を示すような証拠は認められない。実際に、グムラやヒサム・デリーなどの小遺跡にあるハラッパー文化は盛期ハラッパー文化期末、あるいは後期ハラッパー文化初頭に現われた可能性が充分考えられる。その時期になると、コト・ディジ文化はすでに衰退期に入ったし、ハラッパー文化も最盛期を過ぎてだいぶ弱体化しており、かろうじてゴーマル平野に止まり、それより北へ勢力を伸ばす力さえなかったであろう。このような理解こそ、この地域における考古学の証拠、文化関係の実態およびカーボン年代の結果などに整合するのである。一方、盛期ハラッパー期にハラッパー文化が進出していなかった地域は、インダス平原の中で、上述の地域に限らない。たとえば、ポセールが指摘するように、ゴーマル平野から東へハラッパー遺跡が位置するラビ河(Ravi)までの間にハラッパー文化の存在は見られない[Possehl 1982: 15]。この現象はハラッパー文化の北西方向への拡張が全体として消極的であったことを示唆している。ゴーマル平野にお

けるハラッパー文化の僅少さもこのような傾向とかなりの関連があるであろう。

北部ラージャスターンにあるカーリーバンガン I 期文化は時には「ソティ文化」(Sothi Culture), 時には「コト・ディジ関連文化」(Kot Dijian Related Culture)と呼ばれている。ソティ文化は最初は主としてソティとカーリーバンガン I 期の土器に基づき、彩文の白、黒二色施文と一部の独特な器種によって命名された土器文化である。しかし、調査の進展によって、土器面の赤地に白と黒の色で二色彩文様を施すのはなにもこの地方に限らず、南に上シンドのコト・ディジから、北にサライ・コーラ、そして、西はグムラ、ラフマン・デリーなどまで、広範囲にわたって流行していたことがわかった。したがって、二色彩文様はもはや「ソティ文化」のみの特徴として認められなくなった。一方、煩瑣に分類されたカーリーバンガン I 期の A-F 6 群の土器のうち、コト・ディジ式土器の特徴を備えるものが多数を占めていることは明らかである [IA 1962-63: 20-31]。そして、特にソティ文化の代表遺跡とされるソティ、ノハール(Nohar)、シェルプラ(Sherpura)などに出土した土器もコト・ディジ式の球形壺の多さと黒色帯状文の流行が特徴的である [Dikshit 1984: 531-537]。コト・ディジ文化の様相は極めて濃厚である。こうして、その一部の独特な型式を強調するか、または、土器の大勢を重視するか、「ソティ文化」と「コト・ディジ文化」とに対する認識が分かれるところである。しかし、「ソティ文化」と呼べるほどの文化実体の存在は考古学の資料に立脚して証明されるに至っていないのが現状である。近年になって、「コト・ディジ=ソティ文化」、「コト・ディジ関係文化」、あるいは、直接に「コト・ディジ文化」でもって、この地域の文化を一括することが多くなり、その共通性は認められつつある。すなわち、「ソティ文化」として考えられた要素をコト・ディジ文化の地域色に帰して、ともにコト・ディジ文化のもとでまとめて理解するわけである。これは発掘には試掘程度のもものが多く、その成果の正式な公表も常には行われないう現段階の当地域における考古学の実態を考えれば、妥当な認識と言えるかもしれない。したがって、筆者もここでは「コト・ディジ文化」の枠内で、カーリーバンガン I 期文化を代表とするサラスヴァティ盆地における文化を扱う。

カーリーバンガン I 期からこれまで 11 にものぼるカーボンデータが出されている。そのうち、明らかに古すぎる 5000 年代後半 (5565~5260 B.C.) のデータと新しすぎる前 8 世紀以降 (785~180 B.C.) のデータを除いて、2000 年代前半にはいるものは五つ、後半のものは四つある。2000 年代前半のデータは 2980~2655 B.C., 2900~2615 B.C., 2890~2540 B.C., 2645~2310 B.C., 2645~2310 B.C. で、前出の北西地方のコト・ディジ文化の年代とほぼ一致した年代の幅を示している。I 期の下限年代はのちにのべるように、盛期ハ

ラッパー文化で始まったⅡ期のカーボン年代上限によって間接に把握されることができる。したがって、Ⅰ期のコト・ディジ文化の年代はおよそ2000年代前半にあたる。また、この年代はこの地域における盛期ハラッパーの出現時期との関連から見て、ハラッパー城塞下層、ジャリルプールⅡ期、ビンジョール(Binjor)Ⅰ期、バナワリⅠ期などのコト・ディジ文化の年代を間接に示すものと考えられる。

Ⅲ コト・ディジ遺跡の年代問題

上シンド地方にあるコト・ディジ遺跡はコト・ディジ文化の中で唯一のインダス平原南部に位置する遺跡である。そして、この遺跡は南アジア考古学において最初にC-14年代測定法を適用された遺跡でもある。コト・ディジから四つのカーボンデータが発表された。「城塞部」(Citadel)の第14層から出たデータは3370~2900 B.C.である。この年代はこれまで述べたコト・ディジ文化の平均年代の上限よりもかなり上回るものである。まして、コト・ディジ遺跡で最初に現われた文化はすでにかなり発達した様相を示していることを考えると、コト・ディジ文化の上限年代はさらにさかのぼるはずである。その結果はコト・ディジ文化がコト・ディジで起源したという結論につながりかねない。一方、「市街地」(Outer City)の最下層である第5層から出たデータは2980~2545 B.C.と2900~2525 B.C.とである。この二つの年代は、北部のコト・ディジ文化のそれと一致している。すると、以上の三つの年代のうち、どの年代をコト・ディジ遺跡の年代の上限としてとるべきかという問題が生じる。

従来、コト・ディジ遺跡の年代の上限に言及されるとき、常にこれらのカーボン年代から最古のものが取り出されてきた。実際、単にそのデータが数字の上で最古だからという理由で採用されているようである。この採用に際して、特に層位的な確認が行われているとは言えない。そのデータを出した「城塞部」の第14層が「市街地」の第5層より古いという根拠はないのである。ムガルはかつて「城塞部」と「市街地」との層位間の相互関係について検討を行ない、「市街地」の第5層と「城塞部」の第7層とを三角素焼陶板(Terracotta Cake)の存在を根拠に平行させようとした(図1, [Mughal 1970: 52])。しかし、報告書では両地点の層位関係についてはっきりさせていないものの、いくつかの重要な記述があり、この問題に大きな示唆を与えている。まず、「城塞部」の最下層に対して、発掘者は「岩盤の上にある最古の層(The earliest occupation)を表わしている」との表現を使っている[Khan 1965: 35]。一方、「市街地」の最下層に対しては、「この遺跡における最古の住居(the earliest settlement of the site)を表わしている」と記述している[Khan

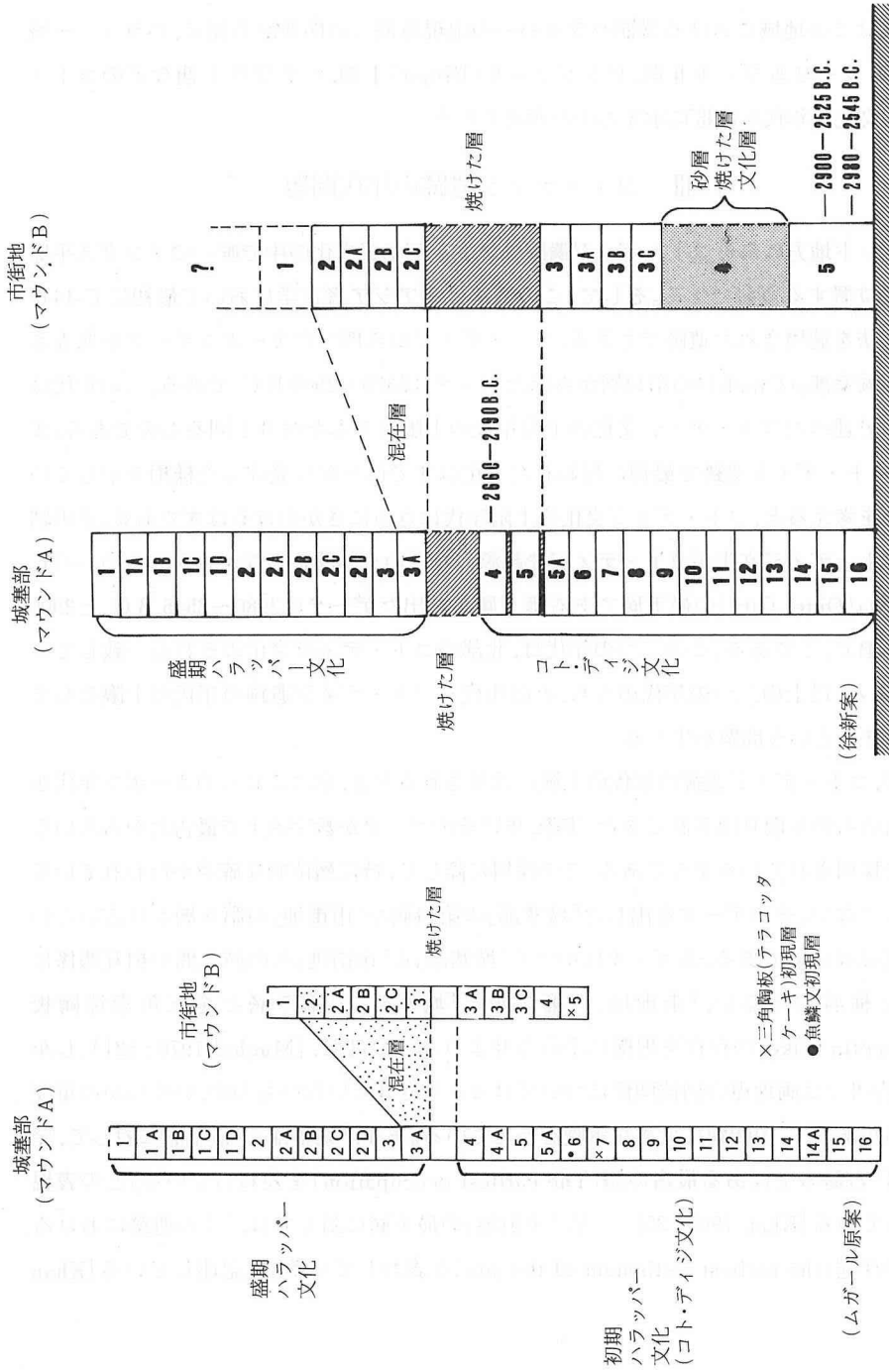


図1 コト・ディジ遺跡における城塞部と市街地との文化層対応図

1965 : 35]。この二つの「最古」という表現はコト・ディジ文化の人々がここにやってきた時点を表わす上でおなじ意味をもっていると筆者は考える。ムガールは、層位を比較したとき、「城塞部」の第7層に三角素焼陶板が始めて出現したと主張している。報告書ではその出土層位について明言してはいない。「大量の焼いていない“ケーキ”(三角陶板のこと)とボールが非常に早期の層から発見されている」と記述するばかりである[Khan 1965 : 83]。周知のように、コト・ディジ遺跡では第7層から上へ三つの層(6層, 5層, 4層)だけをへてコト・ディジ文化は終わるわけである。したがって、全体の厚さ17フィートあるコト・ディジ文化層のうち、その下にさらに9層の文化層(厚さ11フィート)を経た第7層は「非常に早期の層」といえるであろうか。一方、「城塞部」と「市街地」との間の堆積の厚さの差も多くの学者たちにその最古の年代に固執させる要因の一つになっているらしい。確かに「市街地」の地層は「城塞部」のそれより薄い。しかし、その層位の状況に関する報告書の記述に注目すべき点がいくつかある。まず、発掘者によると、「市街地」は「城塞部」より早く終わった様相を帯びているという[Khan 1965 : 34-41]。また、「市街地」の第4層に大量の焼けた層や洪水の跡と思わせる砂層が交じっているなど、かなり不安定な状況が認められる[Khan 1965 : 35, Fig.8, 9]。第4層の何箇所かでハラッパー式土器が検出され、発掘者は「早期ハラッパー期」(early Harappan phases)のものと位置づけた[Khan 1965 : 41-42]。しかし、第4層の上にある第3A層と3層の文化内容はまた完全にコト・ディジ文化のものであるので、その焼けた攪乱層を「城塞部」における焼けた層(盛期ハラッパー文化が現われる直前の「文化断絶」を意味するとされた)と同等に扱うことはできない。実際にカーボンデータ自身もその可能性を否定している。「城塞部」第4層から出た一つのカーボン年代は2660~2190 B.C. であって、「市街地」の焼けた層の下にある第5層から得た二つの年代(前出)との間に数百年もの差があるからである。「市街地」第3層の上に焼けた層があり、その上に重なる第2層以降がはじめて典型的なハラッパー文化層である[Khan 1965 : 35]。したがって、「市街地」の第3層と第2層との間にある焼けた層を、「城塞部」における第4層の上の「断絶層」に平行させることが妥当である。

このように、「文化断絶」の層以前に、「城塞部」にはない不安定な状態を示す焼けた層が「市街地」第4層に存在するのは、コト・ディジの住民が市街地に住んだり、放棄したり、あるいは、城塞部に逃げこんだりといった繰返しを、長期間にわたって行っていたためとみる。「市街地」と「城塞部」との堆積に差が出た理由をこのように説明しておく。

以上をまとめると、コト・ディジ遺跡において、「市街地」と「城塞部」における定住はほぼ同時にはじまった可能性が強い。したがって、「市街地」最下層である第5層から出た二

つのカーボン年代は、「城塞部」第14層のデータよりもコト・ディジ遺跡の最初の時期として相応しいものである(図1)。そして、その年代はほかのコト・ディジ遺跡の上限年代および文化の分布などの実態から見ても最も合理的であるように思える。「市街地」の第4層にみられる不安定な様相やいわゆる「早期ハラッパー期」文化の遺物の混在などの事実から、シンド地方にコト・ディジ文化が進入した直後のコト・ディジ周辺の情勢が窺われる。そのような不安定な情勢の原因については、洪水の脅威もさることながら、まず考えられるのは、発掘者も指摘したように、外来の侵攻である。侵攻はいうまでもなく最終的にコト・ディジを暴力で破壊し、占領したハラッパー文化の人々によるものである。コト・ディジ遺跡におけるハラッパー文化様相の出現は「城塞部」の最下層からすでに認められる[徐朝龍 1988: 121-127]。このことは、この地方におけるハラッパー文化の存在がコト・ディジ文化の人々がコト・ディジにやってくる前にさかのぼることを意味している。上シンド地方、特にモエンジョ・ダールロ周辺におけるハラッパー文化の存在は、インダス平原の中でどこよりも古いように思える。それはコト・ディジに加えて、前出のアムリ I D 期、パーラー・コト II 期、メヘルガール IV 期、そして、ナウシャロ I 期など、モエンジョ・ダールロ周辺におけるハラッパー文化は、いずれも盛期ハラッパー文化期の上限と考えられる2000年代中葉をはるかに上回っているからである。そして、モエンジョ・ダールロ自身からもコト・ディジ遺跡初期とアムリ I D ~ II B 期に並行することを示す証拠が、下層の土器の面で見出されている[徐朝龍 1988: 128-139]。これらの現象を通じて、インダス平原において最も注目される未知の下層文化をもつモエンジョ・ダールロは、ハラッパー文化そのものの起源問題を考える上で一層クローズ・アップされる。そして、上シンド地方におけるこのような古い時期のハラッパー文化の存在は、またコト・ディジ文化の人々が北部平原から離れて単独に上シンドに、しかも、モエンジョ・ダールロの近くに住み着いた理由をも暗示しているように思われる。

IV 盛期ハラッパー文化と後期ハラッパー文化の年代

C-14年代測定法が登場する前には、ハラッパー文化の年代問題は常にメソポタミア先史文化の編年と関連して議論されていた。1930年代、マーシャルはモエンジョ・ダールロの発掘によって明らかにされたハラッパー文化層に3250~2750 B.C. という約五百年間を当てていた[Mashall 1931: 11-176]。その後、モエンジョ・ダールロを再発掘したマッケイはマーシャルより深い層に掘り届いたが、上限年代については、かえって下方修正を行ない、2800 B.C. とし、その最上層には2500 B.C. を与えた[Mackay 1938: 639-668]。1947年、

ウィーラーはモエンジョ・ダークの下層の発掘できない部分を除くハラッパー文化に2500～1500 B.C. という年代を与えた[Wheeler 1947 : 78-82]。その後、ウィーラーはその下限年代をカーボンデータに基づいて上方修正して、1700 B.C. においたが[Wheeler 1968 : 125]、のちに述べることからわかるように、このような年代決定はウィーラーの鋭い洞察力と優れた判断を物語るものである。1964年、アグラワルは修正されないカーボンデータに基づいて、ハラッパー文化の全体の年代を2300～1750 B.C. にあてた[Agrawal 1964 : 950-952]。これはカーボン年代によるハラッパー文化全体の編年の最初の試みである。

いままで、約十数箇所ハラッパー文化遺跡がカーボンデータを与えている。以下はまずインド地方において、モエンジョ・ダークがあるインダス河の西岸、カッチ地方、グジャーラート半島、そして、北部平原という順で年代の検証を進める。

モエンジョ・ダークにおいて、六つのカーボンデータがHR 地区の盛期ハラッパー層と最上層から入手された(表1)。そのうち、最古の年代は2650～2520 B.C. であり、最も新しいのは2210～1975 B.C. である。また、そのほかにジュカール文化期に属すると考えられた層から一つのデータが出て、2165～1860 B.C. である。この年代は間接にモエンジョ・ダークのハラッパー文化に下限を与えると考えられる。カラチの近くにある盛期ハラッパー文化遺跡アラフディーノ(Allahdino)から、三つのデータが出され、それぞれ2555～2325 B.C., 2415～2185 B.C., 2330～2125 B.C. を表わしている。これらの年代の幅を見ると、モエンジョ・ダークのそれとほぼ一致していることがわかる。一方、前出のバーラー・コトⅡ期にある第二のデータは2555～2285 B.C. を示しており、下限年代で上の両遺跡と接近している。また、このような年代の幅は盛期ハラッパー文化とほぼ同時期に南バルチスタン地域で展開していたと考えられているクッリ文化のそれにも合致するものである[Possehl 1986 : 57]。というのは、クッリ文化に与えられた二つのカーボン年代は2560～2295 B.C. (Nindowari)と2320～2090 B.C. (Niai Buthi)になっているからである。

カッチ地方におけるスールコータダ遺跡(Surkotada)は盛期ハラッパー文化でスタートした遺跡である。ここから十個のカーボンデータが発表された。最初のⅠA期に属するのはそれぞれ2555～2285 B.C., 2550～2125 B.C. (?), 2415～2135 B.C., 2410～2105 B.C., であるが、平均して見ると、およそ2000年代後半にあたる。これは上述のインダス河西岸の盛期ハラッパー文化の年代と一致している。そして、ⅠB期には2195～1885 B.C., ⅠC期には2190～1880 B.C., 2185～1875 B.C., 2180～1870 B.C., 2000～1700 B.C. などの

年代が示されて、ハラッパー文化の存続がインダス西岸より長く、後期ハラッパー期を経験していたことがわかる。

グジャラート半島は盛期ハラッパー文化がかなりの発展をとげたところとして知られている。盛期ハラッパー文化がこの地域に進出する前に、ソムナート(Somnath)Ⅰ期やロジディ(Rojidi)Ⅰ-A期段階などに見られるような、2000年代初頭にさかのぼる土着の文化が展開していた。この文化はシンド地方やインダス北部平原における2000年代前半の文化とまったく異なるものであると考えられている[Possehl 1987]。ロータル(Lothal)から九つのカーボンデータが発表された。そのうち、盛期ハラッパー期のロータルA段階に属するのは七つあって、平均して2000年代後半にあたる(表1)。一方、ロータルB段階に与えられた二つの年代は2320~1955 B.C., 2315~1865 B.C.を示しているが、この時期には新しい土器が現われ、文化の様相も大きく変貌した[Rao 1973: 95-103]。土着文化のロジディⅠ-A段階にも七つのデータがあるが、その上限は2000年代前半の中葉に達している。その後Ⅰ-B段階に与えられた六つのデータのうち、一つがⅠ-A段階の年代上限と同じであるものを除くと、五つは2420~1700 B.C.にあてはまるので、盛期ハラッパー期はもちろんのこと、後期ハラッパー文化期もおおっている。

インダス河東岸の上シンド地方における盛期ハラッパー文化の年代については、直接これを示すデータはない。コト・ディジ遺跡においてハラッパー文化による破壊直前の第4層のカーボン年代は2660~2190 B.C.であるので、盛期ハラッパー文化のこの地方を占拠した年代がすくなくとも2000年代中葉にあたることを示唆している。

インダス北部平原において、カーリーバンガーンⅡ期のハラッパー文化は、20以上のカーボンデータをもっている。そのうち、Ⅰ期の年代と同じもの二つを除くと、2645~2310 B.C.をはじめ、2560~2295 B.C., 2440~2180 B.C., 2425~2300 B.C., 2420~2145 B.C., 2415~2135 B.C., 2410~2105 B.C., 2405~2020 B.C., 2340~1980 B.C., 2320~1955 B.C., 2325~1880 B.C.などで、およそ、2000年代中葉から1000年代初頭までの期間を示している。この期間は、大地震によって破壊されたカーリーバンガーンのⅠ期(コト・ディジ文化)の廃墟の上に重なるハラッパー文化層の年代である。

サラスヴァティ盆地の中央部にあるバナワリ(Banawali)において、Ⅰ期のコト・ディジ文化の上にⅡ期のハラッパー文化が現われた。Ⅱ期から四つのカーボンデータが発表された。そのうち、2560~1965 B.C., 2425~1995 B.C.は2000年代中葉にあたり、バナワリがハラッパー文化に占拠されたのは盛期ハラッパー期のはじめ頃からであることを裏付ける。そして、この年代は盛期ハラッパー文化の人々がカーリーバンガーンに進入した時

期と一致する。一方、あと二つのデータは1700～1415 B.C., 1555～1250 B.C. になっている。同遺跡の発掘者はⅢ期に変貌しはじめた文化を「後期ハラッパー文化」と位置づけている[Asthana 1985: 151]が、この二つのⅡ期の年代から見ると、バナワリにおいてⅡ期の後半はすでに後期ハラッパー文化期に入っていたことも考えられる。

ミタタール(Mitathal)遺跡においては、ハラッパー文化様相はコト・ディジ文化系統のシスワル(Siswal) B段階の文化とⅠ期から混在していると報告されている[Suraj Bhan 1975: 4-6]。Ⅰ期から出たカーボン年代は2435～2095 B.C. として記録され、その上限は盛期ハラッパー期のそれに合致している。したがって、この年代からハラッパー文化の人々が最初にミタタールに定着したのは盛期ハラッパー期になってからであることが推定できよう。なお、Ⅱ-A期にも一つのカーボンデータがあり、2165～1860 B.C. である。この年代はまずⅠ期の年代下限を間接に証明するものである。こうして、Ⅰ期の年代幅はほぼ盛期ハラッパー期にあたることになる。しかし、Ⅱ-A期の文化様相を見ると、盛期ハラッパー文化の要素は依然として強いので[Suraj Bhan 1975: 6-8]、後期ハラッパー文化とは見なしがたい。したがって、Ⅱ-A期もⅠ期とともに盛期ハラッパー期とみてもよかろう。それ以降のⅡ-B期は後期ハラッパー文化で、1000年代の半ばにPGW文化(Painted Grey Ware Culture)が取って替わるまで存続したと考えられている。ハリヤナ(Haryana)地方においては、ハラッパー文化はかなりおそくまで続いている。東へ行くほど(デリーまで)時期が新しいという傾向が認められる[Dikshit 1984: 267-268]。

サラスヴァティ北部(サトレジ上流域)においても、ハリヤナ地方と同じ傾向が見られる。バラ(Bara)遺跡において、Ⅰ期から出たカーボン年代は四つあり、2330～1975 B.C., 2335～1885 B.C., 1980～1690 B.C., 1585～1330 B.C. である。バラⅠ期の文化はその強い地域色から特別に「バラ文化」と呼ばれると同時に、濃厚なコト・ディジ文化の様相を帯びていることも指摘されている[Sharma 1982: 161]。一方、盛期ハラッパー文化の混在も早くから認められる。バラの北東わずか6キロのルーバル(Rupar)遺跡においても、Ⅰ-A期から、カーリーバンガンⅠ期に類似する文化の中に、盛期ハラッパーの浸透がすでに始まったことが観察されている。このようなハラッパー文化に先行したはずの文化の中に、早くも盛期ハラッパー文化の浸透が始まったことは、サラスヴァティ地方の北部(特にパンジャブ地方)においてしばしば報告されている[Sharma 1982: 151-161]。カーリーバンガンⅠ期文化のカーボン年代と比べてわかるように、この時期はすでにハラッパー盛期の中頃にあたり、前出のサラスヴァティ盆地南部における文化の年代との間にはかなりの隔りがある。このことは、盛期ハラッパー文化のサラスヴァティ盆地へ

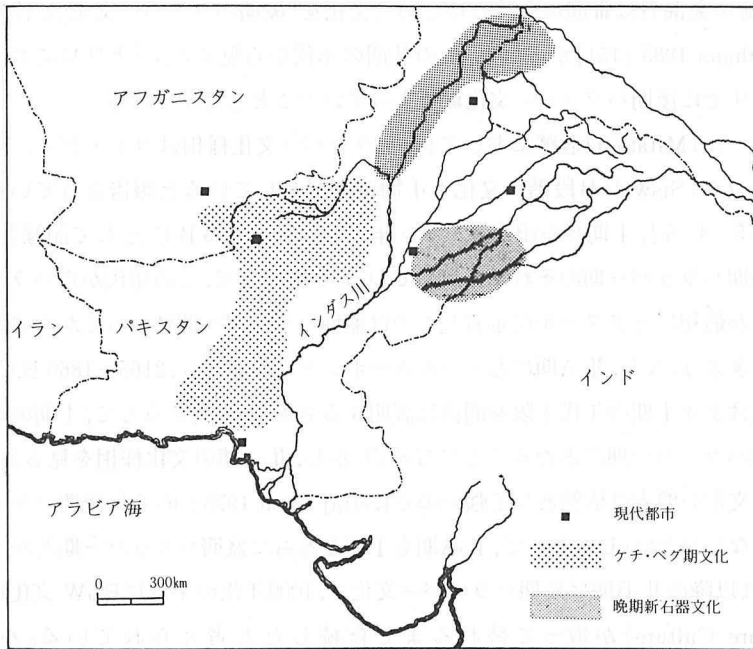


図 2-1 紀元前3000年代後半のバルチスタンとインダス平原

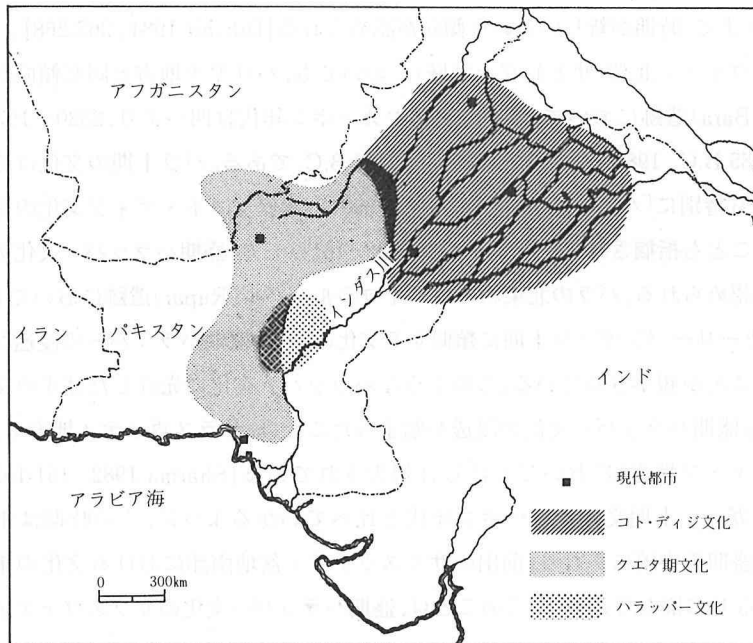


図 2-2 紀元前2000年代前半のバルチスタンとインダス平原

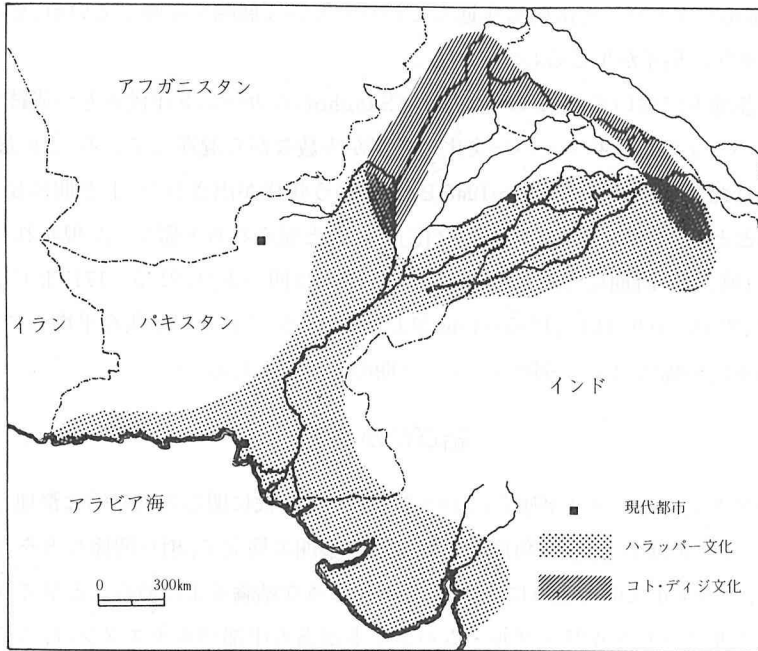


図2-3 紀元前2000年代後半のバルチスタンとインダス平原

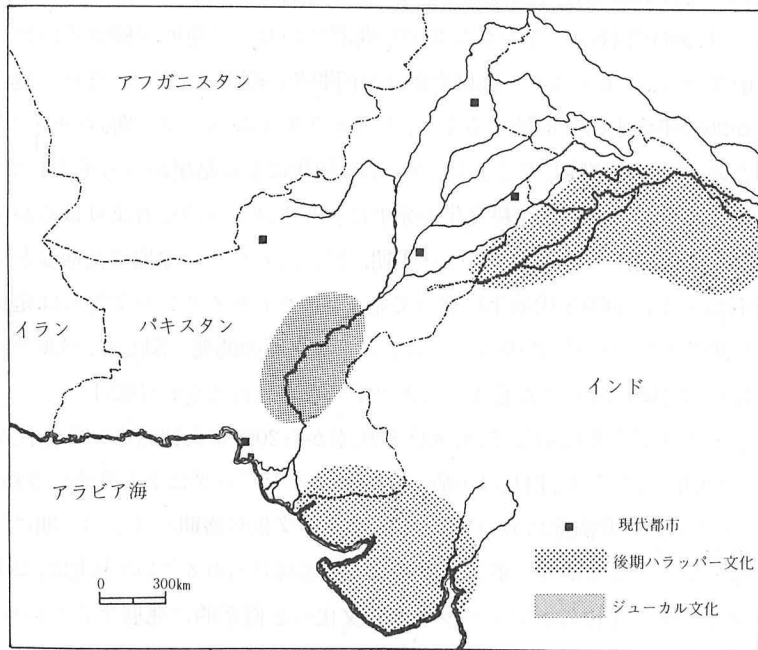


図2-4 紀元前1000年代前半のバルチスタンとインダス平原

の進出にともなって、それまであった文化は圧力を受けて北部へ移動し、そして、それを追って、盛期ハラッパーも次第に北進していったという展開を示唆している。そのため、地域間の年代に格差が生じるわけである。

その北部地方において、サンゴール遺跡(Sanghol)もカーボン年代をもつ遺跡である。I-A期のバラ文化にはハラッパー文化の様相が少数ながら混在している。その最下層から採集されたサンプルから2410~1945 B.C. という年代が出された。I-B期になると、バラ式土器とともにハラッパー「H 墓地文化」のものと見られる土器などが現われた[Bisht 1976: 18-19]。この時期に与えられたカーボン年代は四つあり、2175~1715 B.C., 2160~1700 B.C., 2155~1695 B.C., 1785~1560 B.C. 等である。これらの年代を平均して見れば、I-B期の年代の幅はおおよそ後期ハラッパー期のそれにあたる。

結びにかえて

バルチスタンとインダス平原におけるカーボン年代に関して全般的な整理と検証を行なった。これを通じて、別の角度から諸文化の展開の筋立て、相互関係などをあらためて認識し、その実年代の枠組みについて、以下のような結論をまとめることができる。

1. メヘルガールとキリ・グル・ムハンマドがある中部バルチスタンは、この地域において最古の定住農耕文化の起源地である。その初期文化は少なくとも6000年代前半以前から始まり、3000年代前半までかなりの長期間にわたって発展を続けていた。そして、3000年代前半から、バルチスタン農耕文化は全面開花の時期を迎えた。それら複数の村落農耕文化が2000年代中頃に崩壊するまで、キリ・グル・ムハンマド期、ケチ・ベグ期、クエタ期などの三段階を経験したことは、カーボン年代による結果からも示されている。

2. インダス平原における農耕文化の発生はバルチスタンのそれよりはるかに遅れる。サライ・コーラ I 期やラフマン・デリー I 期、そして、ハークラ土器文化期などに見られる晩期新石器文化は3000年代前半になって始まり、バルチスタンの文化とは発展段階上で相当な格差を示している。このことからインダス平原の開発に関して、バルチスタン文化の寄与はその時期になっても必ずしも大きかったとは言えない(図2-1)。

3. コト・ディジ文化に対しては、3000年代末から2000年代初頭という年代が与えられる。これは大量の、しかも、相互に矛盾しないカーボンデータにより確実に支持される。一方、インダス平原の北西部において、コト・ディジ文化が盛期ハラッパー期にはいつても存続していたことがカーボン年代によって裏付けられる。この事実は、コト・ディジ文化が全インダス平原においてハラッパー文化へと直系的に発展するという「初期ハ

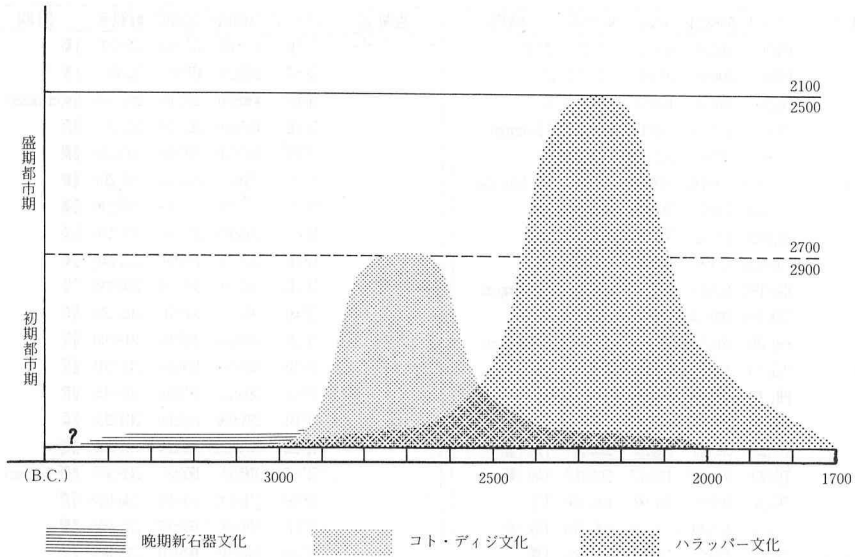


図3 インダス平原における文化の展開と年代関係

「ハラッパー文化説」の核心を否定する。

4. 上シンド地方、モエンジョ・ダロを擁するインダス河西岸においては、ハラッパー文化の上限年代は、カーボンデータと考古学的な証拠によって、インダス平原における既知のハラッパー文化中でどこよりも古い2000年代初頭までさかのぼる。このことはハラッパー文化の初期発展段階がこの地域にあった可能性を強く指示している(図2-2)。また、コト・ディジ文化のシンド進出の時期とコト・ディジ遺跡の興味深い地理位置、ひいては、コト・ディジ文化とハラッパー文化との関係などの諸問題に対する理解に大きな示唆を与えることになる。

5. 盛期ハラッパー文化期の開始は、各遺跡のカーボン年代を総合すると、およそ2600年から2500年までの間に当てはまる。この時期はまたハラッパー文化がインダス北部平原の東南部でコト・ディジ文化に取って代わり、下シンドおよびグジャーラート方面に勢力をのぼす期間でもある(図2-3)。その間、各地で盛期ハラッパー文化の拡張が最も活発に行われていたと想像される。一方、カーボンデータより、「後期ハラッパー文化期」はほぼ2000年代末から1000年代の中葉までの間にあたると考えられる。カーボン年代に反映される傾向から、インダス河西岸においては後期ハラッパー文化がほとんど存在しな

遺跡名	コード	5568BP	5730BC	修正年代(BC)	時期	遺跡名	コード	5568BP	5730BC	修正年代(BC)	時期
アラフディノ (Allahdino)	P-2296	3930±50	2100±53	2555-2325	都市期	カーリーバンガン	TF-240	3610±110	1770±113	2170-1865	I期
	P-2237	3840±60	2010±63	2415-2185	同		TF-957	2355±200	475±205	785-180	I期(?)
	P-2295	3760±70	1930±73	2330-2125	同		TF-160	4060±100	2230±103	2875-2530	II期(Harappan)
アムリ (Amri)	TF-864	4710±110	2900±113	3660-3365	I B(Amrian)		TF-942	4055±110	2225±113	2875-2530	II期
	TF-863	4485±110	2670±113	3375-3020	I C		TF-607	3930±120	2100±124	2645-2310	II期
バーラー・コト (Bala Kot)	UCLA1923A	5200±135	3406±140	4150-3380	I期(Balakotian)		TF-25	3930±110	2100±113	2645-2310	II期
	UCLA1923B	5130±75	3334±75	3960-3795	I期		TF-153	3910±110	2075±113	2635-2300	II期
	UCLA1923C	4865±82	3061±85	3800-3520	I期		TF-608	3910±110	2075±113	2635-2300	II期
	UCLA1923D	4210±80	2386±80	3005-2765	I期		TF-163	3910±100	2075±103	2635-2300	II期
	HAR1992	4050±130	2222±135	2890-2510	II期(Harappan)		TF-145	3895±100	2060±103	2560-2295	II期
	HAR-1993	3890±100	2067±105	2555-2285	II期		TF-481	3879±72	2045±74	2425-2300	II期
バナワリ (Banawali)	PRL-205	3810±180	1975±185	2560-1965	II期(Harappan)		TF-147	3865±100	2030±103	2440-2180	II期
	PRL-203	3800±150	1965±155	2425-1995	II期		TF-948	3815±100	1980±103	2420-2145	II期
	PRL-204	3260±120	1410±124	1700-1415	II期		TF-605	3810±105	1975±108	2415-2135	II期
	PRL-207	3100±100	1245±103	1555-1250	II期		TF-151	3800±100	1965±103	2415-2130	II期
バラ (Bara)	TF-1205	3730±95	1890±98	2330-1975	I期(下層)		TF-139	3775±100	1940±103	2410-2105	II期
	TF-1204	3690±150	1850±155	2335-1885	I期(上層)		TF-947	3765±85	1930±88	2405-2020	II期(Harappan)
	TF-1207	3490±85	1645±88	1980-1690	I期		TF-150	3740±100	1900±103	2340-1980	II期
	TF-1206	3135±100	1280±103	1585-1330	I期(下層)		TF-141	3705±110	1865±113	2320-1955	II期
ダンプ・サダート (Damb Sadaat)	UW-59	4330±70	2510±72	3155-2895	I期		TF-149	3675±140	1835±144	2325-1880	II期
	L-180B	4338±70	2518±361	3365-2785	I期		TF-142	3635±100	1795±103	2190-1880	II期
	L-180E	4367±361	2548±372	3370-2860	II期		TF-152	3615±85	1775±88	2180-1870	II期
	L-180C	4375±412	2556±425	3370-2865	II期		TF-946	3605±100	1765±103	2170-1865	II期
	P-522	4378±196	2560±202	3370-2865	II期		TF-143	3510±110	1665±113	2000-1700	II期
	P-523	4029±74	2200±76	2665-2530	II期		TF-244	3250±90	1400±93	1695-1410	II期
	UW-60	4030±160	2200±165	2880-2395	II期		TF-138	3075±100	1217±105	1540-1240	II期
ガリガイ (Ghaligai)	R-379	4245±55	2422±55	3000-2855	I期	キリ・グルムハンマド (Kili Gul Mohammad)	L-180A	5497±500	3712±515	4555-4090	I期
	R-380	4200±140	2376±145	3035-2635	I期		P-524	5474±83	3690±85	4435-4120	I期
	R-379A	4180±70	2355±70	2910-2765	I期		UW-61	5260±80	3470±82	4165-3885	I期
	R-378A	3760±55	1923±55	2330-2125	II期(Late Kot Dijian)	コト・ディジ (Kot Diji)	P-196	4421±141	2605±145	3370-2900	14層(城塞部)
	R-377A	3455±50	1609±50	1895-1690	II期		P-179	4161±151	2335±156	2980-2545	5層(市街地)
グムラ (Gumla)	P-1882	4210±150	2385±155	3040-2640	II期		P-180	4083±137	2255±141	2900-2525	5層(市街地)
	P-1812	4080±70	2250±72	2870-2545	II期		P-195	3925±134	2095±138	2660-2190	4層(城塞部)
ハタール (Hathial)	P-1813	4040±60	2210±62	2670-2535	Kot Dijian	ロータル (Lothal)	TF-136	3915±130	2080±134	2655-2185	Lothal A
	BM-1949	3750±100	1915±103	2400-1990	Late Kot Dijian		TF-22	3845±110	2010±113	2430-2165	Lothal A
	BM-1948	3600±60	1760±62	2140-1880	Late Kot Dijian		TF-27	3840±110	2095±113	2425-2160	Lothal A
イスラム・チョウキ (Jhang)	BM-1941	3690±450	1850±464	2410-1860	Late Kot Dijian		TF-26	3830±120	1995±124	2425-2155	Lothal A
	BM-2201	4030±50	2190±150	2830-2670	深さ134cm		TF-133	3740±110	1900±113	2340-1980	Lothal A
	BM-2200	3780±220	1916±220	2390	深さ119cm		TF-29	3740±110	1900±113	2340-1980	Lothal A
カーリーバンガン (Kalibangan)	TF-439	6507±125	4752±1130	5565-5260	I期(Early Harappan)		TF-135	3405±125	1555±129	1950-1570	Lothal A
	TF-155	4195±115	2370±118	2980-2655	I期		TF-23	3705±105	1865±108	2320-1955	Lothal B
	TF-157	4120±110	2285±113	2900-2615	I期		TF-19	3650±135	1810±139	2315-1865	Lothal B
	TF-241	4090±90	2265±93	2890-2540	I期	メヘルガル (Mehargarh)	BETA1712	9385±120	7717±125	8215-7215	I-A期
	TF-162	3940±100	2110±103	2645-2310	I期		BETA1407	7115±290	5378±300	6360-5470	I-A期
	TF-161	3890±100	2100±103	2645-2310	I期		BETA1408	6925±80	5183±80	5390-5480	I-A期
	TF-165	3800±100	1965±103	2415-2130	I期		LY-1947	5830±190	4055±196	5020-4440	I-A期
	TF-156	3740±105	1900±108	2340-1980	I期		LY-1948	5720±730	3940±752	4910-4410	I-A期
	TF-154	3665±110	1025±113	2215-1900	I期		LY-1949	5530±180	3745±185	4560-4110	I-A期

表1 カーボンデータ集成(Possehl 1988より)

遺跡名	コード	5568BP	5730BC	修正年代(BC)	時期	
メヘルガール	LY-1946	32650±3000	31680±3090	N.A.	I-B期	
	BETA-1719	13340±125	11790±130	12790-10790	I-B期	
	LY-1950	8440±250	6745±258	N.A.	I-B期	
	LY-994	6290±70	4529±70	5325-5095	I-B期	
	LY-993	6110±90	4343±90	5240-4925	I-B期	
	LY-908	6090±70	4323±70	5215-4930	I-B期	
	LY-906	5950±65	4180±67	5055-4735	I-B期	
	LY-909	5940±55	4170±57	5040-4730	I-B期	
	LY-910	5880±100	4105±103	4975-4565	I-B期?	
	BETA-1720	7115±120	5378±125	6200-5625	II-A期?	
	LY-1945	5360±310	3571±320	4545-3795	II-B期	
	BETA-2039	6500±78	4745±80	5555-5255	III期	
	LY-1528	4190±140	2366±145	3025-2635	IV期	
	LY-1529	3960±140	2129±145	2670-2300	V期 or VI期	
	LY-1527	3570±130	1727±135	2175-1715	VI期 or VII期	
	ミタテール (Mihatal)	PRL-290	3820±130	1985±134	2435-2095	I期
		PRL-291	3600±110	1760±113	2165-1860	II-A期
PRL-292		4210±210	2385±216	3155-2615	II-B期	
モエンジョ・ダロー (Moenjo-daro)	P-1177	3985±64	2155±65	2650-2520	都市期	
	P-1179	3913±64	2080±66	2545-2315	都市期	
	P-1180	3828±61	1995±63	2415-2425*	都市期	
	P-1178A	3802±59	1965±61	2405-2155	都市期	
	P-1176	3801±59	1965±61	2405-2155	都市期	
	P-1182A	3702±63	1865±66	2210-1975	都市期	
	TF-75	3600±110	1760±113	2165-1860	ジュカル層?	
ムンディガク (Mundigak)	TF-1129	4950±105	3150±108	3885-3650	I期, 2-3	
	TF-1132	4805±100	3000±103	3690-3495	I期, 5 or II期, 1	
	TF-1131	4570±100	2755±103	3390-3155	I期, 5	
	GSY-50	3945±150	2113±155	2660-2290	I期, 5	
	GSY-52	3480±115	1634±120	1975-1685	II期, 1	
	GSY-53	4185±150	2361±155	3015-2630	III期, 5	
	GSY-51	2995±110	1135±115	1400-1095	III期, 1	
ニアイ・ブティ	P-478	3740±64	1900±66	2320-2090	II期(Kulli)	
ニンドゥワリ	TF-862	3900±105	2065±108	2560-2295	II期 or III期	
ラナ・グンダイ (Rana Ghundai)	P-2148	5580±60	3797±60	4510-3350	I期	
	P-2149	4600±60	2788±60	3470-3350	III-A期	
ラフマン・デリー (Rehman Dheri)	PRL-676	4520±110	2705±113	3380-3040	I期(Pre-Kot Dijian)	
	PRL-675	4400±110	2580±113	3360-2910	I期	
	WIS-1697	4300±70	2479±70	3055-2885	I期	
	WIS-1698	4190±70	2366±70	2920-2775	I期	
	WIS-1699	4180±70	2355±70	2910-2765	II期(Early Kot)	
	WIS-1700	4070±90	2242±90	2880-2535	II期 Dijian)	
	PRL-674	4000±150	2170±155	2865-2320	II期	
	PRL-673	3900±130	2065±134	2650-2170	III期(Late Kot Dijian)	
	WIS-1701	3850±70	2015±70	2420-2190	III期	
	BM-2062	3730±50	1890±50	2315-2010	III期	
WIS-1702	3620±80	1779±80	2180-1870	III期		
BM-2063	3580±110	1735±113	2150-1770	III期		

遺跡名	コード	5568BP	5730BC	修正年代(BC)	時期	
ロージディ (Rojidi)	PRL-1085	4020±105	2190±108	2680-2315	A段階	
	PRL-1087	4010±110	2180±115	2675-2315	A段階	
	PRL-1283	3980±100	2140±100	2660-2385	A段階	
	PRL-1093	3920±110	2088±115	2640-2305	A段階	
	PRL-1089	3865±115	2030±120	2440-2180	A段階	
	PRL-1284	3810±100	1980±100	2415-2135	A段階	
	PRL-1285	3740±140	1900±145	2410-1945	A段階	
	PRL-1083	3875±125	2040±130	2640-2160	B段階	
	TF-200	3810±110	1975±113	2415-2135	B段階	
	PRL-1088	3767±125	1930±130	2420-1970	B段階	
	TF-199	3590±100	1750±103	2150-1850	B段階	
	PRL-1281	3520±110	1680±110	2015-1710	B段階	
	PRL-1282	3470±140	1620±145	2000-1665	B段階	
	PRL-1084	3700±145	1860±150	2350-1890	C段階	
	サンゴール (Sanghol)	PRL-511	3740±160	1900±165	2410-1945	I期(Post Urban)
PRL-509		3570±150	1725±155	2175-1715	I期	
PRL-510		3550±150	1705±155	2160-1700	I期	
サライ・コーラ (Sarai Khola)	PRL-513	3540±150	1695±155	2155-1695	I期	
	PRL-512	3350±110	1500±113	1785-1560	I期	
	BM-1940	4380±170	2560±175	3360-2385	I期(Neolithic)	
	BM-1939	4310±120	2490±124	3160-2375	I期	
	BM-1934	4250±110	2430±113	3040-2785	I期	
	BM-1935	4140±230	2315±237	3020-2525	I期	
	BM-1944	4040±200	2210±206	2805-2315	II-A期(Early Kot)	
	BM-1936	3890±230	2055±237	2660-2130	II-A期 Dijian)	
	BM-1942	3910±70	2075±72	2545-2315	II-A期	
	BM-1938	3810±60	1975±62	2405-2165	II-A期	
ショートウガイ (Shortugai)	BM-1945	3790±60	1955±62	2400-2150	II-B期(Late Kot)	
	BM-1946	3700±80	1860±82	2315-1945	II-B期 Dijian)	
	BM-1943	3700±60	1860±62	2210-1975	II-B期	
	MC-1730	5524±92	1690±95	2100-1720	IV期	
	NY-521	3432±160	1585±165	1965-1590	IV期	
	スールコータデー (Surkotada)	TF-1305	3890±95	2055±98	2555-2285	I-A期(城塞部)
		TF-1310	3810±95	1975±98	2415-2135	I-A期
TF-1295		3780±95	1945±98	2410-2105	I-A期(市街地)	
TF-1301		3840±130	2005±134	2550-2125	(?)	
TF-1304/9		3645±90	1805±93	2195-1885	I-B期(市街地)	
TF-1297		3635±95	1795±98	2190-1880	I-C期	
TF-1311		3625±90	1785±93	2185-1875	I-C期	
TF-1294		3620±95	1780±98	2180-1870	I-C期	
TF-1307		3510±105	1665±108	2000-1700	I-C期	
PRL-85		4140±130	2315±134	2940-2540	(?)	
タラカイ・キラ (Tarakai Qila)	BM-1695	4060±120	2230±124	2875-2530	Late Kot Dijian	
	BM-1693	3810±60	1975±62	2405-2165	Late Kot Dijian	
	BM-1694	3770±90	1935±93	2405-2020	Late Kot Dijian	
	BM-1692	3680±50	1840±52	2195-1960	Late Kot Dijian	
	BM-1690	3640±80	1800±82	2190-1880	Late Kot Dijian	
	BM-1691	3510±60	1665±62	1970-1740	Late Kot Dijian	

* Possehl 1988, p.188のまま

遺跡名		(BC)	7000	6000	5500	5000	4500	4000	3500	3000	2500	2000	1500
パ ル チ ス タ ン と そ の 周 辺	メヘルガール		IA	IB	IIA(?)	IIB	III(?)	IV	V	VI	VII		
	キリ・グルムハンマド		I(?)		II		III	IV					
	ラナ・グンダイ					I	II(?)	IIIA					
	ダンプ・サダート							I	II	III			
	バーラー・コト							I		II			
	アムリ							IA	IB	IC	ID	II	III
	ニアイ・プティ									I(?)		II	
	ニンドゥワリ									I	II	III	
	ムンディガク							I	II	III	IV	V	
	シャハリ・ソフタ								I	II	III		IV
イ ン ダ ス	サライ・コーラ								I	II	III		
	ラフマン・デリー								I	II	III		
	グムラ								I(?)	II	III	IV	
	ハターラ										Kot Dijian		
	コト・ディジ										16 ~ 4層	3 ~ 1層	
	ジャング										(下層)	(上層)	
	ハティアール									(?)	Late Kot Dijian		
	タラカイ・キラ										(下層)	(上層)	
	イスラム・チョウキ									(?)	Late Kot Dijian		
	ガリガイ										Late Kot Dijian		
平 原	カーリーバンガーン									I期	II期		
	バナワリ									I期(?)	II期		
	ミタタール										I期	IIA	
	バラ										I期		
	サンゴール										I期		
	モエンジョ・ダーロ										都市期	Jhukar期	
	アラフディーノ										都市期		
	スールコータダー										IA	IB-C	
	ロタール										A	B	
	ロージディ										A	B	

表2 カーボン年代によるバルチスタンとインダス平原における先史文化の編年表

いのに対して、河東の地域では、グジャーラート半島、カッチ地方から、ハークラ・ガッガル涸河流域に沿うチョーリスターン地方をへてサラスヴァティ盆地、ハリヤナ、上サトレジなどの地方まで、広範囲に大量の後期ハラッパー文化は存続していたことがわかる(図2-4)。このことは盛期ハラッパー期から始まった、インダス河西岸より東岸地方への文化の拡張に伴う人間の持続的な移動の結果をほのめかしているように思われる。

こうして、カーボンデータから、バルチスタンとインダス平原とにおける先史文化の編年に対し、実年代上の再構成を試みた(表2)。これによって、この地域における諸文化の発生、展開および衰退についての理解を進めることができた(図3)。一方、カーボン年代はいろいろな問題点をも提示している。その中で特に重大な問題として浮び上がってきたのは、インダス文明の研究で大きな焦点となっているコト・ディジ文化とハラッパー文化との関係である。それは言い換れば、ハラッパー文化の起源に関する問題でもある。カーボン年代に示唆された問題となる地域において、フィールドワークも同じ方向に向かい、この問題に迫っている。たとえば、最近のノウシャー口の発掘(インダス下流西岸)とラフマン・デリーの発掘(北部平原の北西部)がこの傾向を現わしている。

謝辞：本稿の執筆に際し、京都大学人文科学研究所教授桑山正進先生に多くの助言と貴重な資料の提供をいただいた。末筆ながら深く感謝する。

参考文献

Agrawala, D. P.

1964 Harappa culture. New Evidence for a Shorter Chronology, *Science*, No. 3609, 950-952

1982 *The Archaeology of India, Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series* No. 46. Curzon Press. London and Malmo.

Agrawala, D. P. and S. Kusumgar (others)

1964-1971 Tata Institute Radiocarbon Data List, *Radiocarbon*. Vols. 5-13.

Allchin, B. and F. R. Allchin

1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge.

1981 Preliminary Report on the Excavation at Taraki Qila(1978-79). *South Asian Archaeology*

1979, Härtel, H. (ed), Berlin 245-250.

Asthana, Sh.

1985 *Pre-Harappan Cultures of India and the Borderlands*, New Delhi.

Bisht, R. S.

1976 Transformation of the Harappan Culture in Punjab with Special Reference to the Excavation at Sanghol and Chandigarh. *Archaeological Congress and Seminar. 1972. Roorki.*

Casal, J. M.

1964 *Fouilles d'Amri*, 2 vols., Paris.

1979 Amri : An Introduction to the History of the Indus Civilization, *Essays in Indian Proto-history*, D.P. Agrawal and K. Chakrabarti(ed.), Delhi.

Dales, F. G.

1965 A Suggested Chronology for Afghanistan, Baluchistan, and the Indus Valley, *Chronologies in the Old World Archaeology*, R.W. Ehrich, (ed.), Chicago, 257-284.

1973 Archaeological and Radiocarbon Chronologies for Prehistoric South Asia, *South Asian Archaeology 1971*. Norman Hammond, (ed.), London, 157-170.

1979 The Balakot Project : Summary of Four Years Excavations in Pakistan, *South Asian Archaeology 1977*. M. Taddei (ed.), Naples, 241-273.

Dani, A. H.

1970-71 Excavations in the Gomal Valley, *AP*, Vol. 5 : 1-177.

Dikshit, K. N.

1984 The Sothi Complex : Old Records and Fresh Observations, *Frontiers of the Indus Civilization*, B.B. Lal and S.P. Gupta(ed.), New Delhi.

Fairservis, W. A., Jr.

1975 *The Roots of Ancient India*, 2nd edition, Chicago.

Jarrige, J. F. and M. Lechevallier

1979 Excavations at Mehrgarh, Baluchistan : Their Significance in the Prehistorical Context of the Indo-Pakistani Borderlands, *South Asian Archaeology 1977*. M. Taddei (ed.), Naples, 463-535.

Khan, F. A.

1965 Excavations at Kot Diji, *PA*, Vol. 2, 13-85.

Mackay, E. J. E.

1938 *Further Excavations at Mohenjo-daro*, 2 Vols, New Delhi.

Mashall, J.

- 1931 *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. 3 Vols., London.
- Meadow, R. H.
- 1973 A Chronology for the Indo-Iranian Borderlands and Southern Baluchistan 4000-2000 B.C., *Radiocarbon and Indian Archaeology*, D.P. Agrawal and A. Ghosh (ed.), Bombay.
- Michael, H. N. and E.K. Ralph
- 1971 *Dating Techniques for the Archaeologist*, Boston.
- 1973 Radiocarbon Dates and Reality, *MASCA Newsletter*, Vol. 9, No.1, 1-20.
- Mughal, M. R.
- 1970 The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan (3000-2400 B.C.), Ph. D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Pennsylvania.
- 1972 Excavation at Jalilpur, *PA*, No. 8, 117-124.
- 1974 New Evidence of the Early Harappan Culture From Jalilpur, *PA*, Vol. 27, No.2, 106-113.
- 1982 Recent Archaeological Research in the Cholistan Desert, *Harappan Civilization*, G.L. Possehl(ed.), New Delhi, 85-96.
- Possehl, G. L.
- 1982 The Harappan Civilization : A Contemporary Perspective, *Harappan Civilization*, G.L. Possehl(ed.), New Delhi, 15-30.
- 1986 *Kulli : An Exploration of Ancient Civilization in Asia*, Durham, North Carolina.
- 1987 The Sorath Harappan : A New Regional Manifestation of the Indus Urban Phase, *South Asian Archaeology 1987*, (in press).
- 1988 Radiocarbon Dates from South Asia, *Man and Environment*, Vol. 12.
- Rao, S. P.
- 1973 *Lothal and the Indus Civilization*. Bombay.
- Sharma, Y. D.
- 1982 Harappan Complex on the Sutlej(India), *Harappan Civilization*, G.L. Possehl(ed.), New Delhi, 141-165.
- Suraj Bhan
- 1975 *Excavation at Mitathal(1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*, Kurukshetra.
- Thomas, K. D. and F. R. Allchin
- 1986 Radiocarbon Dating of Some Early Sites in N.W. Pakistan, *South Asian Studies*, No.2.

Wheeler, R. E. M.

1947 Harappa 1946 : the Defences and Cemetery R. 37, *AI*, No. 3, 59-133.

1968 *The Indus Civilization*, (3rd ed.) Supplementary Volume to the Cambridge History of India, Cambridge.

徐朝龍 (Xu Chaolong)

1987 バルチスタン先史文化四段階の設定, 『西南アジア研究』, 26, 1-30.

1988 上シンド盛期ハラッパー以前の土器, 『史林』, 71(4), 117-147.